

古代ギリシアの私役奴隸

—アリストパネエスの奴隸たちII—

河 底 尚 吾

II. 屋内奴隸の職能

§1. 奴隸の理念と現実

私役奴隸の名称を吟味すれば、どうしてもその名がしめす実体を吟味せざるをえなくなることは、前章であきらかであった。つまり奴隸の名称は、奴隸のたずさわる仕事がどのようなものであったのか、という問をあらたに誘発したのである。そこでこれから、その名称にもとづき、主として屋内ではたらく奴隸の職能についてかんがえてみよう。

その手はじめとして、まずアリストテレエスのことばをもう一度ここで想いおこさねばならない。

彼はこう言った。「奴隸は一種の生きた品物である。下僕はすべていろいろな道具のまゝに存在する道具なのである。」¹⁾ さらにまた下僕(hypēretēs)は使用者の行為に属する道具である、というのが彼のかんがえかたである。使用者の片腕となつてはたらくのが奴隸であり、その片腕が使用者のためにぎりしめる槌や、片腕がひく車もまた道具であるが、アリストテレエスにしてみれば、水車が水をはこんでも、馬が車をひいても、奴隸がそれとおなじことをしても、すべて使用者の行為に属することであつて水車や馬や奴隸はおなじレベルの道具にす

ぎない²⁾。

ところが奴隸は使用者の道具であるにしても、奴隸は同時に他の道具(槌や車や刃物等)をつかう行為者であり、生産者であることは否定できない事実であるから、アリストテレエスが、奴隸を労働行為だけに限定し、生産者とみなすことを排除したのは片手おちである、ということをおぼしめす³⁾。

徹底道具主義にもとづいて奴隸を見るかぎり、動物と人間との区別をしないのであるから、現実の世界では、はなはだしい矛盾が生じる。現実には奴隸は人間でないと言言できる根拠がないからである。その矛盾が、実は使用者の奴隸に対する不安、不信としてあらわれ、プラトンのように、奴隸をあつかうには、厳罰と思いやりの二面をたえず考慮せざるをえなくなるのである⁴⁾。

しかし一方、奴隸を道具と見なさないかぎり、そもそも奴隸の存在はありえないだろう。奴隸制度が容認されている以上、理論的にはア

1) Arist. Pol. 1253 b, 34; 拙稿前章『召使の名称』§1.

2) 奴隸と他の非人間的なものが同列にとりあつかわれるのは、つとにホメロスの時代にも見られる。「その船々から、頭髪を長く延ばしたアカイア勢は酒を購って来た。ある人々は青銅を代りにやつて、ある人々は輝く鉄を代りとし、あるいは牛の皮で、あるいは生きていた牛自体に換えて、あるいは奴隸(ανδραπόδισσι)を代りに与えて」Ilias, VII, 572~5 (呉 茂一訳、『世界古典文学全集 1』筑摩書房, 1981)

3) *ibid.* §1.

4) *cf. ibid.* §3.

リストテレエスの奴隷に関する定義はただしいとみとめなければならない。その定義のただしさや厳密さの点では、あれほど社会の矛盾を攻撃し、精確な理論を展開したプラトオンよりもリストテレエスの理論の方がはるかにまさっている⁵⁾。しかし、ただしさや厳密さにゆるみが生じるとすれば、それはいったいなにを意味しているのだろうか。

プラトオンのように、奴隷に対して不安や不信の念が生じれば、必然的に奴隷制度に対しても、なにがしかの払拭しきれない不安や不信の念をいだかざるをえないはずである。これは、奴隷が単なる使用者の道具ではなくて人間であるという、機械的奴隷からはみ出た人間の存在をも容認するかんがえかたであって、しかもそれはプラトオンだけの奴隷観というのではなく、彼と同時代のアリストパネエスにも見られるかんがえかたなのである。

たとえば『蛙』のなかで、主人のディオニューソスの姿に変装した召使のクサンティアァスが、ディオニューソスから衣裳をとりかえてくれと言われ、それをことわると、「奴隷で人間でもあるおまえが、アルクメネの息子になるなんて⁶⁾」と、なじられている。しかもそれとおなじ意味のことが、もっとはっきりしたことばで、召使のクサンティアァス自身の口からも発せられる⁷⁾。

このように古代ギリシアの奴隷、或は奴隷制

- 5) 前5世紀におけるギリシア民主主義全盛時代の人間観が、プラトオンの奴隷に対する見かたに反映しているとおもわれる。これに対し、民主主義衰退期の前4世紀中葉におけるアリストテレエスの奴隷観に、純理念の方が現実の奴隷の存在よりも先行してきたことは、ヘレニズム期およびローマにおける奴隷制を理解するうえで、注目すべき傾向と言えよう。
- 6) Ar., Ba. 531. ここで言われる奴隷と人間ということばは、ともに神(ディオニューソス)と対比されてつかわれているが、奴隷と人間とがともに列挙されている点では、奴隷に対する見かたがいっそうはっきりしている。
- 7) *ibid.* 583. ここでは「奴隷であると同時に人間でもあるわたし」と表現されている。

を論じるばあい、すくなくともアリストテレエスの純理念的な道具論と、プラトオン或はアリストパネエスのような奴隷かつ人間という、理念と現実の両面にまたがった不安定な奴隷観があることを考慮しておく必要があるだろう。

さて、アリストパネエスは奴隷の姿にたえず人間を、つまり一般市民をかさねあわせてかんがえていることは、これまでの例によってもその一端をうかがうことができるが、市民と奴隷の両者はかならずしもひとしく肩をならべているわけではない。

コロス

それからこの都市にはだれも不名誉なことがあってはなりません。

はずかしいことですからね、一度海でたたかった者が、

プラタイアイ人たちみたいにすぐ奴隷にかわって御主人さまになるというのは。

でもそのことを私はよくなかったのじゃないかと、ケチをつけてるわけではなく、

賛成しているのですよ、なんと言っても、みなさんが理解したうでやったことといえば、そのことだけなんですからね⁸⁾。

これは『蛙』のなかのさわり的一部分である。古喜劇にはパラバァシスとよばれる手法があり、作者の意見が、芝居の筋とは関係なく、登場人物の代表の口から直接観客へむけてうたえられた。アリストパネエスはこの部分によって、その年の演劇祭で一等賞をえたとされるほど、このパラバァシスは熱のこもった場面なのである。したがって、ここでは、劇的なフィクションであるよりは、一般的に事実にかいかいことがらがのべられるため、知らず知らずのうちに、わたしたちは彼の思考や歴史的事実そのものに注意をひかれることになる。

ここで言われている「一度海でたたかった

8) *ibid.* 692~96.

者」というのは、奴隷たちのことをさしているわけで、それはペロポネエソス戦争の末期、アルギヌッサイの海戦でアテネ側が勝利をおさめた際、兵員不足をおぎなうため、異例の奴隷採用をした事実にもとづいている⁹⁾。また、プラタイアイ人たちについては、それより21年まえ、ペロポネエソス同盟軍によってプラタイアイ市が攻略された際、アテネ市にのがれてきた難民に対して、市民権があたえられた事実をさしているのである¹⁰⁾。

上例にある作者口上には、微妙な心理的動揺が、たくみなことばづかいによってぼかされているのに気づく。その前半では、奴隷や異国人たちがアテネ人と同列の主人になることに対するひそかな反撥心が顔をのぞかせているし、後半では、その反撥心が公的な場所で表明されるのはふさわしくないと作者はすぐさま反省して、アテネ人にとった措置を称揚するという、逆方向の心理のうごきをしめしている¹¹⁾。これによって、一概に、古代ギリシアの

奴隷は自由市民の道具である、と単純にわりきれない面があったということを、わたしは重視したい。そうしないと現実生活において、古代ギリシア人たちの奴隷に対する矛盾した感情を無視してしまう結果になるからである。

もちろん自由市民は奴隷を現代のロボットのようにみなして、自分たちと奴隷とのあいだに、明確な一線を画していた事実は否定できない。そのきびしい差別は、この世ばかりではなく、あの世に行っても貫徹されている。ディオニューソスが召使のクサンティアアスをつれて下界へおりるため、そこの湖(三途の川)を舟でわたろうとしたとき、渡守カロンはこう言うのだ。「奴隷(dūlon)はのせないぞ、肉体に賭けて海でたたかったことがないなら¹²⁾。」これはきびしいことばであるが、また条件づきであるところが、先例の作者口上と心理的に共通したためらいを感じさせる。しかし、奴隷であるクサンティアアスは、結局、舟にのることができず、主人と行動を別にして、自分は走って湖をまわり、目的地に到達しなければならなかったのである¹³⁾。

9) 前406年、アテネ軍は戦況不利のまま、レスボス島はミュティレネで、コノンの指揮する軍隊が敵に攻囲され、窮地におちいったとき、かろうじて一艘の軍船がアテネへ脱出し、救助をもとめた。本国ではただちに救援隊が組織され、110艘の船隊をもって出港。途中近傍の島島からも救援船が参加し、都合150艘をこえる大船団となった。ところがこの船団を満たす兵員は自由市民だけでは不足で、緊急措置として従来みとめられなかった奴隷の採用が決定された。しかも彼らは帰還後は奴隷の身分から解放され、自由市民となるばかりでなく、その子孫は公職につきうる権利をも約束されたのである。Cf. B. B. Rogers, *The Frogs of Aristophanes*, Introduction, G. Bell & Sons, London, 1919.

10) 前427年、ペロポネエソス同盟軍に攻略され、にげのびてきた212人のプラタイアイ人に対して、アテネは市民権をあたえる決議をし、メディア戦争以来約1世紀ちかくにわたる同盟市民の友誼にこたえたのである。cf. ΓΙΑΝΝΗΣ ΟΙΚΟΝΟΜΙΑΔΗΣ, *ΑΡΙΣΤΟΦΑΝΟΥΣ ΑΙΛΑΝΤΑ*, p. 225 n.; Victor Coulon, *Aristophane*, Tome IV, p. 692, Société d'Édition «Les Belles Lettres», Paris, 1967.

11) これら外来市民や解放奴隷は、ほとんどすべての市民権をあたえられたにもかかわらず、聖職や執政職(Archōn)は除外された。これは当時のアテネ市民一般の感情にそぐわなかった

一つの証拠であろう。B. B. Rogersも前掲書において、“This exception was right and proper”とのべている。もっともこの例外措置は、彼らの子供たち以降の世代には除去されたが。

12) Ar., *Ba.* 190~1. 「肉体(kreōn)を賭けて海でたたかった」というのは、その肉体が死体なのか生体なのかで、説がいろいろにわかれるが(scholia参照)、それは当面の問題とかけはなれるので、ここではこれ以上ふれないことにする。要するにこの条件文は、奴隷が戦闘に参加して市民権を獲得した事実を、ほのめかしていることはまちがいあるまい。

13) Victor Ehrenbergが「クサンティアアスを舟にのせず、池をまわらせたのは、彼を舞台から立ちざらせ、ディオニューソスひとりだけが權をこいで、わらいものになる場面をつくるために、かんがえ出されたものである」と解釈しているのは、あまりにもoptionalでありすぎる。[*The People of Aristophanes*, p. 190, Schocken Books, New York, 1962] 作劇上から見ても、いままで肩をならべてきた主人と召使が、現実と彼岸との瀬戸ぎわに立って、自分自身を再確認する(クサンティアアスはすなおに自分がなにものであるのかみとめている)必然性こそが、この二人の道行をおかしくもかなしくしている要素だとおもわれる。

これほど両者の性格が対照的に活写されている場面は、アリストパネエスの作品でもあまり例を見ないが、市民と奴隷、或は自由と束縛とがときには熱っぽくからみあい、ときにはつめたく反撥しあいながら、日常生活のなかで息づいているさまは、ほかにも数多く観察することができる。

§2. 玄 関 番

トロイア戦争は紀元前13世紀ごろ、ギリシア軍とトロイア軍とのあいだでたたかわれたとされているが、攻撃したギリシア軍は、10年間の攻防をかさねたあげく、かろうじて勝利をおさめ、例のごとくトロイア全市民を殺害し、女性は奴隷として本国へつれて帰った。この歴史的な事件（当時はなかば伝説として知られていたが）を題材にして、前415年に、エウリュピデスが『トロイアの女たち』というすぐれた悲劇を上演した。しかもその劇を書く直接の動機となったのが、前年の416年、エイゲ海に浮かぶメエロス（ミロス）島でおこった、いわゆるメエロス島虐殺事件であったと言われる。これは、ペロポネエソス同盟の一員としてスパルタ側に協力していたメエロス島民を、なんとか自国側へひき入れようとしたアテネの政治工作が失敗し、その結果アテネを主軸とする同盟軍がこの島を攻撃して、島民の成人した男子全員を死刑、婦女子を奴隷にするという、悲惨な事件であった¹⁴⁾。

『トロイアの女たち』は、それよりおよそ800年前の伝説的事件と、なまなましい同時代の事件とが二重うつしになって完成された作品なのである。その劇のなかで、トロイアの女王ヘカベは、奴隷の身となってギリシアへとらわれて行くわが身をなげき、つぎのように言う。

「ああ、ああ、このみじめな老いぼれたわた

14) トゥキディデスは、とくに、この侵攻にふみきる直前のアテネ、メエロス両代表の会談のもようを、熱をこめてつたえている。V, 84~116。
なお、Ar., Or. 186もこれにふれている。

しは、いったいどこの土地の奴婢になるのだろうか (dūleusō), 屍のようなこのみじめな姿、死人のようなよわよわしい体は、前門の見張り役として (τὰν παρὰ προθύρους φυλακάν) 立つのか、それとも子供たちのお守りをするのか、トロイアの女王としてうやまわれたわたしが?¹⁵⁾」

一国の女王であっても、ひとたび敗戦のうき目にあえば、例外なく奴隷として身を屈しなければならぬという事実を、彼女は承知したうえで、将来の自分の生活を想定している。そのありべき奴隷の仕事の一つとして、玄関番の役割を彼女はかんがえた。しかも女王である彼女の頭に想いのかんたのは、或る貴族の豪邸の「前門の見張り役」なのである。いまここで重要なのは、主人が住む邸宅の大きさや、彼の身分の上下ではなく、想いかべられている奴隷の職能である。これは彼女の単なる想いつぎでないことは、その後の彼女のせりふのなかにある、「奴婢として門の鍵を見張る¹⁶⁾」ということばからも察しられる。つまり、玄関に立ち、来訪者の対応をするものは奴隷であることが、悲劇を通じてあきらかにされているわけである。喜劇にあらわれる門番、或は玄関番は、その多くが男であり¹⁷⁾、典型的な玄関番は『アカルナイの人びと』、『蛙』、『福の神』に見られる。

現存するアリストパネエスの作品中、もっともふるい年代に属している『アカルナイの人びと』(前425年上演)は、主戦派のクレオンに対して、和平派のアリストパネエスが勇気をふるって挑戦した、いわば反戦劇と言ってもいい作品である。アカルナイのまずしい炭焼村民たちをコロスにえらんで、主人公のディカイオポリスが、政治家たちとは別途に、アテネ

15) Eur., *TPQIAAEY*, 190~196.

16) *ibid.* 492~3.

17) 玄関番は男女をとわない。cf. Menandros, *ATCKOAOY* 『気むずかし屋』, 「ええ、ごめん、受付さん、女でも男でも、玄関番のかたはいないんで」(呉茂一訳, ギリシア喜劇全集第二巻, 人文書院, 昭和36年, p. 466)

とスパルタとの和平を独自の方法でおしすすめ。はじめのうちは疑惑をいだいていた村民たちも、彼のすぎまじい熱意にうたれて、和平論者に転向し、主戦論者をやりこめるというのがその大筋である。

その劇の一場面で、ディカイオポリスは、村民たちをまえにして演説をぶつことになるが、それにはまずしいぼろ服を身にまとうのがもっとも効果的であると判断し、その衣裳を悲劇作家のエウリュピデースの家へ措りに行くところがある。彼が戸をノックするとエウリュピデースの召使があらわれる。しかし作品を見るかぎり、この召使は奴隷であるのかどうかもまず問題となるところである。その混乱をおこさせる第一の原因は scholia にある。

Ravennas 本によると、その text には、Θε. つまり Θεράπων (Therapōn) とあるが、scholia 395 には「ディカイオポリスが戸をたたくのにならぬエウリュピデースのケピソポオンがこたえる」と記されている。ケピソポオンというのは、もと奴隷であったが、のちにエウリュピデースの仕事仲間として、自由の身になっていた文才のある人物と言われている¹⁸⁾。それゆえ、B. B. Rogers は、その名がここでつかわれてもおかしくはないとして、ケピソポオンの命名を支持する¹⁹⁾。ところが W. J. Starkie は、“This is an error, which receives no support in the text of R.” と言い、実際に召使には名前などないのだと主張している。したがって彼はここで R. 本とはことなり、はっきりと Θυρωρός (玄関番) ということばをつかっているのである²⁰⁾。

- 18) Kēphisophōn—Ar., Ba. 『蛙』にも、エウリュピデースと肩をならべるほどの才能をもった人物であるように言われている。1408, 1452f.
- 19) *The Comedies of Aristophanes* edited, translated and explained by Benjamin Bickley Rogers, vol. 1, London, G. Bell and Sons, 1910.
- 20) W. J. M. Starkie, *The Acharnians of Aristophanes with Introduction English Prose Translation, Critical Notes and Commentary*,

さらに K. J. Dover は、たとえケピソポオンという名はあたえられていても、これはあきらかに奴隷であると説く。その理由は、ディカイオポリスをむかえ入れた召使が、悲劇調のことばで対応したことについて、ディカイオポリスが感心し、「奴隷 (ὁ δούλος) まだが、これほど賢明に応答する²¹⁾」と言ったことばから、ここで戸をあけたのは奴隷であることはあきらかであるとするのである²²⁾。そのほか、この一人の人物をめぐるさまざまな解釈がなされているが²³⁾、しかし玄関番として登場した場合には、その人物は奴隷であるという見解は、全般的に容認されていると言えよう。

客人の対応にあたる人物は他の召使たちにくらべ、かなり重要な役割があたえられている。アリストパネエスが彼らに奴隷らしからぬ名をつけているのもその一つのあらわれと言えるだろうし、彼らが呼ばれる名称も、その機能上、Θυρωρός (θύρα=door, ὄρα=care) という、とくに奴隷を意識させない語があり、また彼らは客を主人にとりつぐばかりでなく、客を訊問し、場合によっては客を玄関払いする力さえもっていた²⁴⁾。ふつう、実際に彼らを呼ぶばあいには、“pais” ということばがつかわれるが²⁵⁾,

MacMillan, London, 1909. Θυρωρός ということばは、さきにあげたヘカベエの言う「門の見張り役」とほぼ共通の意味をもつ。

- 21) Ar., Ach. 401.
- 22) K. J. Dover, *Aristophanic Comedy*, p. 9 n., University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1972.
- 23) ほかにいくつかの解釈をあげれば、F. W. Fall & W. M. Geldard (*Aristophanis Comoediae, Oxonii*) や W. C. Green (*Aristophanis Acharnenses et Equites*, Rivingstons, London) はケピソポオンを支持。Φ. ΓΙΟΥΦΥΛΛΗ (ΑΡΙΣΤΟΦΑΝΟΥΣ ΑΧΑΡΝΗΣ, ΠΑΙΠΥΡΟΣ ΕΝ ΑΘΗΝΑΙΣ) は text ではケピソポオンを、訳では θεράπων をあてている。V. Coulon (*Aristophane*, Tome 1, Paris, Budé) は θεράπων をとり、また Γ. ΟΙΚΟΝΟΜΙΑΗ (ΑΡΙΣΤΟΦΑΝΟΥΣ ΑΙΧΑΝΤΑ, Δ. Δαρεμᾶ) は Ὑπηρέτης と訳している。
- 24) Ach. 395 f., 402, Ba. 464 ff., Pl. 1097 ff.
- 25) Ach. 395, Ne. 132, 1145, Ba. 37, 464.

上例に見られるようなディカイオポリスの言った *dulos* (奴隷) というあからさまなことばは、したがって、心理的にきわめて屈折した状況のなかで発せられたとかんがえなければならない。

学識教養に富んでいるケピソポオンという名で呼ばれるほどの玄関番ではあっても、奴隷の身分であることも事実なのに、一市民の来訪に頭をひくくしてむかえるどころか、感情をさかなでするような悲劇調の名文句をならべたて、気のきいた問答をするのを、ディカイオポリスはこころよくおもわなかったにちがいない。しかしエウリュピデスの才能をみとめているディカイオポリスとしては、その玄関番のすばらしい教養をほめてやらないわけにはゆかない。即座に発する彼のほめことばが、完全にあまく熟さず、その芯に舌をさすような酸味をとどめていたとしても、不自然ではあるまい。W. C. Green は「その男がそんなにすばらしいなら、主人の方はいったいどう言えばいいだろう²⁶⁾」と皮肉っているほどである。

このように、たとえすぐれた能力をもっている人物でも、いったん奴隷という立場におかれると、たちまち夢は現実にひきもどされ、自由人の陰にまわって、自分のすすんで行く目標をかえねばならない。だから、くだんの玄関番はそれっきり舞台から姿を消してしまっているのである。

『蛙』に登場する玄関番はすでにのべたように²⁷⁾、アイアコスという英雄の名をもつ気のあらい人物で、ヘラクレスに変装したディオニューソスの来訪に際し、かって冥府の犬をつれさった彼のことを、泥棒呼ばわりでどなりつけ、神に属するその訪問客のどぎもをぬく²⁸⁾。

26) *ibid.* p. 36n.

27) 前章 §1.

28) ヘラクレスは12の功業をなしとげた英雄だが、その一つに冥府の番犬ケルベロスをうばいさる難業をはたした。その冥府の鍵を管理していたのがアイアコスであった。この舞台に登場するディオニューソスはヘラクレスの姿

このかぎりでは、奴隷も自由な市民も同列の関係にある。さらに、いったん舞台をひきさがった玄関番アイアコスは、部下たちをひきつけてふたたび登場し、訪問客二人を部下たちに逮捕させ、自分はおもいきりこの二人に答をふる。これはまさしく奴隷が主人の役を演じているわけで、彼の部下たちはさしづめ逮捕の役目をうけもつ弓護役なのである²⁹⁾。奴隷が主人の役を演じ、主人が答でうたれる奴隷の役を演じるのを見て、野外劇場をうずめつくす市民たちは憤慨するよりも、腹をかかえて笑い興じたのである。人間性をうしない、完全に道具化された概念で奴隷をとりあつかうアリストテレス以降の、とくに近代における奴隷処遇の苛酷さから見ると、信じられないほどの余裕を感じさせる。

この答うちがすむと、例のパラバシス(作者口上)がつづき、市民の平等と聡明な寛大さが観客にうったえられる。そのあと、二人の奴隷アイアコスとクサンティアァスが仲よく登場するが、このときの玄関番は、もはや英雄らしさも主人気どりもまったく見られず、主人のかげ口をたたいて、たがいになぐさめあう類型的な奴隷の姿をさらけ出している。

アイアコス

救いの神ゼウスにちかかって言うが、えらい人だよおまえの主人は。

クサンティアァス

えらいだって? そりゃそうさ、彼が知っていることといたら、飲むことと、抱くことだけなんだ。

アイアコス

それにしても、おまえをぶたなかったね、うそがバレてもさ、おまえは奴隷のくせにご主人さまだなんて言っちゃって。

クサンティアァス

で、また玄関番はアイアコスという名の奴隷で、両者あいまみえたわけである。

29) 弓護役については、拙稿『公役奴隷』§2, §3.

ぶったらあいつこそ泣きっ面さ。

アイアコス

それだ、まさしく奴隷らしいことをすぐにおまえさんはやらかしちゃうんだ。おれだってよろこんでやるぞ。

クサンティアァス

あんたがよろこんでやる、というと？

アイアコス

つまり、なんとも言えねえいい気分ってとき、こっそり主人の悪口をたたいているときはな。

クサンティアァス

じゃ、どうだい、さんざん答でぶたれて外にたたき出されたとき、わいわい口走るってのは？

アイアコス

そいつもたのしいね。

クサンティアァス

じゃ、余計なおせっかいをやくのは？

アイアコス

こりゃたまらん。

クサンティアァス

同類のゼウスさま！ で、主人がなにかべちゃくちや話しているのをぬすみ聞きするのは？

アイアコス

気が狂うなんてもんじゃないぞ！

クサンティアァス

しかもそいつを外でペラペラしゃべりまくるってのはどうだ？

アイアコス

おれがか？ きっと、そんなことをしているときには、もうがまんできずたれ流しちゃう³⁰⁾。

ここでも、いや、こういう姿を見てこそと言うべきかもしれないが、観客は自由人と奴隷との境界をそこに見出して安堵し、共感をえたと

30) Ba. 738~753.

おもわれるのである。しかもこの二人の奴隷の会話には、喜劇の虚構や誇張をとりのぞいたとしても、なおかつ陽のあたらない彼らの生活感情の側面が、べつとりと色濃くぬりこめられているのを感じないわけにはゆかない。

これは『福の神』に登場するクレミュロスの玄関番カリオォンのばあいにも、同様に言えることである。神の身であるヘルメェスが、いまはだれも犠牲をささげてくれない世のなかとなり、そのために空腹をかかえ、乞食に身をおとして、農夫クレミュロスの家をおとずれる。戸をあけて出てきたのは召使のカリオォンで、彼は劇のはじめの方では、主人のお伴をして旅に出ているが、ここでは玄関番の役である。すくなくともこの劇に関するかぎり、彼にあたえられた権限は大きい。とにかく、この神(ヘルメェス)のねがいをきき入れて、この家で雇うかどうかをきめること、雇うとすればどんな仕事をさせるか、ということをや彼の一存できめることができるのである。しかし、そういう権限をあたえられてはいても、彼は奴隷というきびしい現実の世界を、ヘルメェスのことばによってたちまちおもい知らされる。

「ところで、大いそぎで走って主人を呼んできてくれ、それから奥さんと子供たちだ、それから彼らの召使たち(therapontas)、つぎに犬、それからおまえ自身、それから豚を³¹⁾。」

ここにならべたてられた家族構成は、およそ一般家庭内の序列をあらわしている。玄関番のカリオォンは犬や豚なみである。もちろん、このことをもってアリストパネェスが奴隷をとくに軽視していると判断するのは早計だろう。J. Vogt もこの序列に注目し、「それにもかかわらず彼は個人としては劇に登場する主要人物である³²⁾」と言い、劇中のカリオォンの役を重視し

31) Pl. 1103~6.

32) Joseph Vogt, *Sklaverei und Humanität. Studien zur antiken Sklaverei und ihrer Erforschung*, Franz Steiner, Wiesbaden, 1965. (*Ancient Slavery and the Ideal of Man*, translated by Thomas Wiedemann, Basil Blackwell, Oxford, 1974, p. 11)

ている。たしかにそのとおりである。劇全体から見れば、この奴隷の役割の重要性は他の主役と比較して遜色ない。

ところが、それは劇作法による評価であって、人物固有の個人的な評価ではない。奴隷の役割が劇中で重要な意味をもってくるのは、とりもなおさず、この劇が古喜劇や中喜劇の手法から脱して、新喜劇の段階に入ろうとしていることをしめすものであり、それは前4世紀後半から前3世紀前半にかけてのヘレニズム期に活躍した、メナンドロスやピレモンの喜劇作家に、共通して見られる特徴であるし、ローマ時代におけるプラウトス、テレンティウスの喜劇に至っては、それがいっそう顕著である。しかし、そのように奴隷の活躍する場が拡大される一方、奴隷が機械化され、アリストテレエスの奴隷観がますます固定化されてきたことも見のがせない事実である。

この『福の神』は、一面では奴隷の機能を拡大しながら（つまり、市民による利用度をたかめながら）、他面では奴隷の社会的地位を固定してゆく傾向をはっきりしめしている一つの例と言えるだろう。

§3. 運搬人

奴隷が荷物運搬の役をするのは、喜劇ではよく見られる³³⁾。『蛙』の冒頭で、召使のクサンティアァスは主人のディオニューソスのお伴をして登場するが、この二人のようすを見ると、主従関係が逆転していることがわかる。それはつぎのせりふからもあきらかである。

クサンティアァス

ああ、この首こそあわれなもんだ、(荷物に)

おしつぶされ冗談も言えないなんて。

ディオニューソス

そいつはのぼせあがりの、ぜいたくすぎるってもんじゃないのか？ 酒壺の神の息子である、このディオニューソスおれ自身は歩いて、つらいおもいをして、そちらはろばにのっけてやっていると、くるしくないように重荷をかつがせないようにとおもってさ³⁴⁾。

主人の方は歩き、奴隷の召使は、ろばにのって旅をしているわけである。こんなことは実際にはありえない状況だが、しかし奴隷のクサンティアァスは身分を心得ているというのか、習慣が身につけているというべきか、せっかくの主人の好意にもかかわらず、おもい荷物をかついだまま、ろばにのっているのである。

これは、かりに召使が主人とおなじ生活をしたとしても、所詮、召使は奴隷の生活をたどるほかはないという、一つの悲観的な暗示を作者がつけているのかもしれない。なぜなら、これにつづく二人の対話は、奴隷と自由市民とのあいだにはりめぐらされている壁のあつさを、いやおうなく感じさせるからである。

クサンティアァス

おれが(重荷を)かついでないですって？

ディオニューソス

どうしてかつげるんだ？ ろばにのってるものが。

クサンティアァス

こうやってかついでますよ。

ディオニューソス

どうやって？

クサンティアァス

ずっしりとおもくね。

ディオニューソス

おまえがかついでいるその重荷をろばがかついでいるんじゃないのか？

クサンティアァス

33) Ar., Ba. 13~15 に、アリストパネエスと同時代の喜劇作家プリウニコス、アメイプシアァス、リュキスの作品にも、荷物をかつぐ奴隷がしきりに出てくるとのべられている。

34) *ibid.* 19~24.

どういたしまして、おれがもってるものはおれがかついでるんで、絶対にろばなんかじゃない。

ディオニューソス

だから、どうしておまえがかつげるんだ？

自分がほかのやつにかつがれているのに。

クサンティアァス

知りませんね。とにかくこの肩はおしつぶされそうだ³⁵⁾。

このばあい、たがいに話を理解できないために生じるおかしきには、二つの意味がある。一つは喜劇的なとぼけたおかしき、もう一つは両者の頑迷とも言えるほど自己の立場を固執するおかしきである。アリストパネェスはそのどちらもねらっているわけであるが、主人は主人の見かたで、奴隷は奴隷の見かたでおしとおすかぎり、両者の議論はいよいよ理解できない壁でさえぎられる。この壁をのりこえるためには、主人はろばと奴隷の立場をひっくりかえしてしまわねばならない。そこで「それじゃ、おまえはこのろばがおまえの役にたたないと言うのなら、かわりにおまえがろばをかついでこべ³⁶⁾」と、主人は一喝するのである。そうすることによって、奴隷はろばと同列になり、主人と召使という多少でも人間性をみとめていた関係は、完全に主人と非人間的な道具という関係になってしまう。しかし、これは主人の方からの解決策である。召使の方から見れば、両者の対立を解決しうる方法はただ一つ、自分が自由の身になるほかはない。「なんとなさけないことだ。なぜおれは海戦に参加しなかったのだろ

う？³⁷⁾ そうしたらおまえさんを泣かせてやるんだが、なんだかんだと用事を言いつけてさ³⁸⁾。」もちろん、それは実現されるわけがない。

いずれにしろ、アリストパネェスの精いっぱいいなしえたことは、召使の人間性をみとめて、彼をろばのうえにのせることだった。しかし結局は、主人にひきずりおろされるというのが、両者の行きつかざるをえない結末だったのである。劇の進行もここで別の場面へと転換をせまられ、これ以上両者の議論は伸展しないことをあきらかにしている。

荷かつぎはアテナイばかりでなく、他の都市にも見られるが、しかし、それはかならずしも奴隷であるとはかぎらない。

『アカルナイの人びと』では、ディカイオポリスと取引するために、アテナイにやってきたポイオティアの商人とその召使の奴隷は、兩人とも荷をかついでいる³⁹⁾。もっとも彼らはふつうの家庭の主従の関係とはちがひ、商人であるから主人が荷をかつぐこともかんがえられる。ところが商売がすむと、主人は買い入れた品物（実はアテナイ特有の「訴訟屋」という人間）をはこぼせるために、「さあ、イスメニァス、こっちさ来て肩をさげろ」と、ポイオティアなまりで荷をかつぐよう奴隷に命じている⁴⁰⁾。

主人につきそって荷物をはこぶわけではないが、主人に命じられたものをはこぶ仕事も奴隷の役目である。これは多種多様で、そのほとんどが家庭内での雑用といってもいい。『アカルナイの人びと』と『平和』に登場する召使は、

35) *ibid.* 25~30. この「おしつぶされそうだ」ということばは、文字どおり重荷が肩にくいこむつらさをあらわしているのだが、同時に「ずっしりとおもくね」というせりふとともに、主人の命令の重圧を暗示する心理的な苦痛も表現しているとかんがえられる。cf. *Aristophanes with the English Translation of Benjamin Bickley Rogers, vol. II, "The Frogs" The Loeb Classical Library, pp. 298~9 n.*

36) *ibid.* 31~32.

37) アルギヌッサイの海戦。海戦に参加した奴隷は自由の身になれた。v. 本章 §1., 9 n.

38) *Ba.* 33~34.

39) *Ar., Ach.* 860~63. この主人は「いてて、見てくれ、わしの肩を。なんてひどいこと！」と言っていることから、荷をかついでいたことがわかる。

40) *ibid.* 954. このポイオティア商人は、さきに召使に対して「ハッカの荷をそっとおろせ」と命じている。

主人につぎつぎと用事を言いつけられている。いまそれを列挙してみると、つぎのようなぐあいである。

『アカルナイの人びと』

エウリュピデェスが召使に、

「テレポスのぼろ服を彼にわたせ」(432)

ディカイオポリスが召使に、

「ここへ神酒をもってこい」(1061), 「神酒をもとへもどせ。柄杓をもってこい」(1067), 「ここに弁当箱をもち出してくれ」(1098), 「腸づめを火からおろしてここへもってこい」(1119), 「空腹をささえる焼パンをもってこい」(1124), 「チズぬりの丸せんべいをくれ」(1126), 「一升びんをもってきてくれ」(1133)

ラマコスが召使に、

「ここに兵糧箱をもち出してくれ」(1097), 「タイム入りの塩をもってこい」(1099), 「塩魚を一包みもってきてくれ」(1101), 「兜から羽根を二本もってこい」(1103), 「三本前立ての入った箱をもってきてくれ」(1109), 「槍をおろして、ここへもち出してくれ」(1118), 「楯支えをもってきてくれ」(1123), 「ゴルゴンの絵のついた円楯をもってこい」(1125), 「戦闘用の胸あてをもってこい」(1132)

『平和』

「戦争」が「騒動」に対して⁴¹⁾,

「走って摺りこぎをもってきてくれないか？」(259), 「この道具をまたもって行ってくれ」(287)

トリュガイオスが召使に、

「大いそぎでこの女をつれて、なかへ通せ」(842), 「大いそぎで羊をつれてこい」(937), 「お神酒をつげ、そして臍もつをこっちへも

ってこい」(1102)

また、『雲』でもつぎのような例がある。

ストレプシアデェスが召使に、

「おい、ランプをつけろ、そして通帳をもってきてくれ」(18~19), 「とんがり棒をもってこい」(1297), 「はしごをもって出てこい、それにつるはしもだ」(1486)

もちろん、ここに見られる召使の仕事は、かぎられた舞台のうえでおこなわれる特殊な例であるかもしれないけれど、主人が自分でもできるようなかなり小さな仕事までも、召使の手や足が立ち入ってうごいていたことを、これらの例はかなり明確におしえてくれる。

こういった召使たちの行為は、主人みずからおこなったとしても、作劇のうえでは不都合が生じるわけではないし、その点ではかならずしも召使たちの登場を必要とするものではないはずだ。しかし、ここにえがかれている市民生活、ひいては現実の生活においては、彼らの登場は欠くべからざるものである。アリストパネェスの芸術が召使を必要としているのではない。召使を必要とする生活を、アリストパネェスは舞台に展開させたのである。したがって、彼らはどんな些細な場面であっても、主人や家族にとって必要とされるなら(現実生活から見て)、たとえ無言であっても召使として姿をあらわさざるをえない。これは喜劇ばかりでなく、悲劇のばあいでも同様である⁴²⁾。演劇が、

42) アイスキュロスでは、いわゆるΠΡΟΣΩΠΑ(登場人物)として奴隷が出てくる作品は数すくないが、人物の役からかんがえると、召使の機能をもつものがある。たとえば、『縛られたプロメテウス』のヘルメウス。『アガメムノン』のカッサンドラ。その他、エウリュピデェスの『トロイアの女』や『ヘカベ』では、コロス全体が捕虜として奴隷の集団とも見なされる。また主要人物にはかならず従者がつきそって、無言の登場をしているとかんがえられるので、事実上、悲劇でも召使の使用は必要であったと言わざるを得ない。もちろん、新喜劇、ロマ喜劇では、さらにいっそう個人的な家庭生活がえがかれるため、奴隷なしには劇がなりたないほどである。

41) 「戦争」(πόλεμος)によって生じる「騒動」(κυδοιμός)は、それぞれ主従関係をあらわしている。アリストパネェスの作劇上の手法の一つ。実際の舞台では、このような名をもった人物とかんがえてもいいだろう。

とくに喜劇は、その時代の世相風俗を反映しているとすれば、アリストパネエスの舞台上で演じられる主人と召使との交流は、現実生活へのアナゴゴン(等比関係)をみちびき出す好対象になるはずである。

毎日、家庭内で主人をはじめ家族のものから、ひっきりなしに命令されつづけてうごきまわる召使たちが、逃亡をかんがえたり、クサンティアアスのように、「なんだかんだと用事を言いつけて」主人たちを泣かせてやりたいとぼやくのも、あながち一喜劇作者の空想の産物だとは言いきれまい⁴³⁾。

§4. 子 守 役

プラトンは奴隷のとりあつかいに関して、きびしさとやさしさとの両面が必要であると主張していたことはすでにのべたが、これに対しては、G. R. Morrow をはじめとするかなりつよい反対意見もある⁴⁴⁾。しかし注意しなければならないのは、プラトンは奴隷制廃止をとえなかったことと、いまここで論じられている奴隷と自由市民との関係とは問題がことなるということである。

プラトンの奴隷観にしても、制度的な奴隷と観念的奴隷とが混在し、それが彼の奴隷に対するとりあつかいかたの基礎になっているとおもわれる。蔑視されている奴隷が自由市民のうえに立つことは、崇高な理想社会を夢みるこの哲学者にも、耐えられない屈辱と感じられたよ

43) Platōn, *Nom.* VI, 778. 「召使への呼びかけは、およそなんでも命令となるようにしなければならない」という一節を想起せよ。

44) その収約的論文は、前掲の M. I. Finley 編, *Slavery in Classical Antiquity* (同訳書『西洋古代の奴隷制』東京大学出版会) 参照。とくに Finley 自身の *Was Greek civilization Based on Slave Labour?* *Historia* 8, 1959, pp. 145~64, (訳書 pp. 71~120), および Gregory Vlastos, *Slavery in Plato's Thought*, *The philosophical Review* 50, 1941, pp. 291~3, (訳書 pp. 195~214) は示唆に富む。G. R. Morrow については, *Plato's Law of Slavery*, University of Illinois, 1939.

うである。それは、アルギヌッサイの海戦に参加した奴隷たちが解放され、市民権をあたえられたときに、市民のうえに立つ聖職や執政職にはありつけないようにした、あの市民感情に共通している。たとえば、『リュシス』のなかに出てくるソクラテエスのかんがえかたが、端的にそれをものがたっている。

少年リュシスは、自分の父が奴隷の馭者に驟馬のとりあつかいをまかせているのに、自分には答をうつこともゆるしてくれない、と言ったことに対して、ソクラテエスは同情するようなおどろきのことばを発しているし、またリュシスが、自分は奴隷のパイダゴゴス(付き人)に管理されているのだと言うと、ソクラテエスは、「自由人が奴隷に管理されるとは滅相もないことだ⁴⁵⁾」とびっくりしている(かのように話している⁴⁶⁾)。ソクラテエスがいかにか世情にうといからといって、パイダゴゴスの存在を知らないわけではなく、また、それがどういう役割をはたしていたかについて無知であったはずもない⁴⁷⁾。それにもかかわらず、ここで彼がこのようなことばを発することは、理念とは別の奴隷に対する感情を表現したものと推察することができるのである。

ソクラテエス(或はプラトオン)は、理想的には奴隷を適正な判断力、つまり理性を欠如

45) Pl., *Lysis*, 208 c.

46) ソクラテエスは、少年から付き人に監督されていることを知らされなくても、当時のアテナイでは、それはどの家庭でも日常茶飯事であったから、当然知っていたはずである。相手は子供であり、話を先へすすめるために、演技的にわざと大げさにこう言ったとわたしは解釈する。彼の話の目的は、あとでのべられるように、ほかにあったのである。しかしこれを演技としてではなく、率直にうけとっている論者もいる。たとえば J. Vogt, *op. cit.* p. 112.

47) 彼自身、パイダゴゴスの存在や機能、必要性について論じているのである。Pl., *Nom.* VII, 808 D-E, *Pol.* II, 373 c. 外国との比較では, *Alk. I*, 121 E~122 B, *Lys.* 208 c, 223 A. ことに *Lys.* では、ソクラテエスの面前に、リュシスにつきそうパイダゴゴスがいるのである。

したものと見なしている⁴⁸⁾。そこから、奴隷が適正な判断力や理性、知性をもつものに支配されるのは自然であり、それは善であるという結論がみちびき出されている。これは理性(logos)さらには魂(psychē)を最高のものと見なすプラトンのかんがえかたからすれば、当然の帰結でもあろう。そうであるなら、適正な知性や理性をもって判断しうる能力があるものは、だれであれ、他のものに隷属するのではなく、支配したり管理したりする立場にあることを意味する。

子供は馬を馭する能力や社会的知識がとぼしく、また未熟でもある。そこで父や母がリュシスを馬にちかづけなかつたり、付き人の管理のもとに学校や体育場へかよわせるのは、当然のことと見なされるのである。ということは、たとえ奴隷の身分であっても、馬を馭する技術や知識が充分にあり、子供を管理する能力がそなわっていれば、それらの点に関しては他人から隷属をまぬがれることになる。自由市民の子であるリュシスにゆるされなくて、奴隷にゆるされるようなことがあるのは、プラトンの理念からすれば公正な見かたと言えらるだろう。彼はこれをつぎのように説明している。

「或るものどもに関してわれわれが思慮分別のある者だということを示すなら、それらについてはわれわれにすべての人びとが任せるだろう。ギリシア人たちも外国人たちも、また男たちも女たちも、すなわち、それらにおいてはなんでもわれわれの欲することをなすことになるだろうし、また誰一人われわれをみづからすすんで妨げないことになるだろう、いや、われわれはそれらのものにおいては自分自身が自由であって、他の人びとの支配者であることになり、またそれらのものはわれわれのものであることになるだろう——それらからわれわれは利益を得るだろうからね。しかし或るものどもに

関してわれわれが理知を獲得しないなら、それらについては誰もわれわれが善いと思うことをなすのをわれわれに任せてはくれないことになるだろう、いや、すべての人びとが力の及ぶかぎり、邪魔することになるだろう、それは赤の他人だけではない、また父も母も、それからこれらの者よりもっと親しい者があれば、その者もだ、——そしてそれらのものにおいてわれわれ自身は他の人びとの従属者であり、またそれらのものは他人のものであることになるだろう。というのはそれらのものから何一つわれわれは利益を得ないだろうからね⁵⁰⁾。」

プラトンの理念が、ギリシア人すべてを代表するかんがえかたであるとは言えないにしても、これによってあれほど奴隷を卑下し、自由人と差別していた市民たちが、重要な子女の養育や子守役を、どうして奴隷たちにまかせていたのかが、或る程度理解できる。

しかしながら、パイダゴゴス(付き人)は奴隷の仕事とされてはいるものの、実際には、要するに子供たちの子守役であり、あそび相手である。ギリシア語もろくに通じない異国人が多い奴隷たちであってみれば、子供たちに直接教育をほどこすことは無理であるし、各家庭に教育者としての能力をもった召使が数多くいたとはかんがえられない⁵¹⁾。専門の教師はもちろん学校にいて、『雲』に登場するソクラテスのように、子弟の教育にあたっていた⁵²⁾。付

48) Pl., *Nom.* V. 726~27, *Tim.* 46 d 4.

49) Pl., *Alk.* I, 135 c, *Pol.* IV, 442 A ff. *Phaid.* 80 A.

50) Pl., *Lys.* 210 b~c. 『プラトン全集』4, 「リュシス」山本光雄訳, p. 301, 1973, 角川書店。

51) Pl., *Lys.* 223~B に、ギリシア語がよく話せず、異国なまりの付き人たちが、祭りの酒に酔って子供を呼びにくところがある。上流階級の家庭において、このような程度の付き人なのである。彼らが子供たちに家庭で予習復習をさせたというのは一般的な話ではなく、前5世紀のギリシアでは、むしろまれであったと言わなければならない。cf. J. Vogt, *op. cit.* pp. 110~111, T. B. L. Webster, *Every Life in Classical Athens*, p. 47 f.

52) 教師の専門分野は大別して三つある。①paidotribēs<体育教師>(Pl., *Gor.* 452 A~B, 464 A, 504 A; *Pol.* 294 D~E, 295 C; *Kri.* 47 B;

き人は学校へ子供たちを送りむかえする役で、授業中は教室の片すみで授業がおわるのをまっていた⁵³⁾。また、付き人は学校だけでなく、子供が体育場へ行くときにも、体育に使用する道具（たとえば、まりや洗面具など）をもって、子供に付きそのがつねであった⁵⁴⁾。

児童にこのような付き人を必要とする理由は、そうすることによって市民の自尊心を表示することもあったろうが、実情は昨今の日本の児童集団登校下校にも見られるように、街頭での危険を防止する対策であったとおもわれる⁵⁵⁾。

Theai. 178 D; *Alk.* I, 107 E, 118 D; *Lys.* 207 D, etc. ②*grammatistēs*〈習字教師〉(Pl., *Prot.* 312 B, 326 D; *Aks.* 336 E; *Euth.* 276 A, C, 279 E; *Charm.* 159 C, 160 A, 161 D; *Alk.* I, 114 C, etc. ③*kitharistēs*〈音楽教師〉(Pl., *Alk.* I, 118 D, 129 C~E; *Charm.* 160 A; *Euth.* 272 C, 276 A; *Nom.* VII, 812 B~D; *Theai.* 178 D, 206 A, etc.

- 53) 前5世紀初頭の酒杯にえがかれている絵によると、音楽（キタラ、笛）の演奏、文字の読み書きや朗読している場面が見られる。そして子供と教師を見まもるようにして、その一端に*paidagōgos*の姿もえがかれている。或は、これはPl. *Nom.* VII, 811~812にのべられている視學員(*paidēvtrēs*)であるとも見うけられる。cf. T. B. L. Webster, *Everyday Life in Classical Athens*, B. T. Batsford, London, 1969, pp. 46~47.
- 54) *Ar.*, frg. 139. 「まりや垢こすりをもって、子供たちのお伴をしなければならないならば」という一片が見られる。しかし、奴隷は体育場(*palaistra*)のなかに入ることはゆるされなかった。
- 55) アテナイの町では酔っぱらいや盗人、ゆすり、殺害が多く、昼間でも危険であった。酔っぱらいについてはDemosthenes, LIV, 7~14; Lysias, IV 7, III 12~20; Platon, *Symp.* 212 C~213 A, 殺害についてはAntiphon, *Tetralogia A*を参照。またアリストパネエスの*Sph.*『蜂』の主題がしめすように、アテナイでは毎日裁判がおこなわれるほど、事件が続発している。『アカルナイの人びと』(818~28, 910~28), 『福の神』(850~950)では、ゆすり、盗人の悪質な「訴訟屋」(*Sykophantēs*)の横行をえがいている。なお児童に付き人が必要である理由として、町の治安のわるさに言及しているのはJ. Vogt, *op. cit.* p. 111; 夜の治安につい

アリストパネエスは子供の教育について関心をよせてはいるが⁵⁶⁾、パイダゴゴスについては、ほとんどふれるところがない。また、悲劇ではかなり重視されているけれども、学校や体育場の送りむかえの付き人ではなく、もっぱら家庭内での子守役で、それも老僕や乳母として登場するばあいが多⁵⁷⁾。

子守役の典型は乳母(*τρεθη*)、もしくは保母(*τροφός*)である。*paidagōgos*が幼少年相手の男の子守役とするなら、*titthē*, *trophos*は乳幼児や少女相手の女の子守役と言えるだろう。

子守役の仕事は乳児をそだてることからじまって、その子が学校へかよう年令まで、しつけを身につけさせたり、あそび相手になったりすることであるが、それだけでなく子供がさらに成長して結婚するまで世話をするのがふつうである。しかし、『ヒッポリュトス』に登場する保母(*trophos*)は、恋になやむ王妃パイドラをなぐさめることばのなかで、「わたしはあなたさまをおそだてしましたし、いつもあなたさまのためをおもっているのです⁵⁸⁾」と言っているところから見ると、女の子守役は子供の結婚後もいっしょに新家庭のなかへ入って、新妻の身の世話や相談にあずかっていたことがわかる。悲劇ではこの子守役は*trophos*(保母)と呼ばれ⁵⁹⁾、アリストパネエスの喜劇では、もっぱら乳児の子守役として、*titthē*(乳母)と

てはV. Ehrenberg, *op. cit.* p. 177, K. J. Dover, *op. cit.* p. 106.

- 56) cf. *Ar.*, *Ne.* 88 ff. しかしここでとりあつかわれている教育は、あまりにも功利的である。むしろ59以下の両親が子供の将来を夢みて、自分たちの理想を語る部分の方が教育的であろう。
- 57) Aischylos, *Koeph.*; Sophokles, *Trach.*, *Elec.*; Euripides, *Alkes.*, *Med.*, *Hip.*, *And.*, *Hek.*, *Hikes.*, *Iōn*, *Hel.*, *Phoen.*, *Iph. en Aul.* cf. Thomas Wiedemann, *Greek and Roman Slavery*, Croom Helm, London, 1981, p. 125, Quintilian, *Educating an Orator*, 1, 1; p. 128, Seneca, *Letters*, 12.
- 58) *Eur.*, *Hippol.* 698.
- 59) *Eur.*, *Hippol.* では*trophos*(保母)であるが、*Iōn*や*Alkes.*では*therapōn*(仕え人)として登場。

呼ばれている⁶⁰⁾。

『ヒッポリュトス』のばあいは貴族社会の例であるが、一般的にアテナイ市民の子女は、どのような教育をどのようにうけることが、もっとも理想的であったのか。それについては、プラトオンが『法律』のなかでくわしく論じている⁶¹⁾。それによると、人間は3歳ごろまでは、きびしくそだてることも、あまやかしてそだてることも、赤児にとってりっぱな養育とは言えない。人間の性格はこの時期に形成されるので、保母 (trophoi) は中庸の方法をえらんで、ときにはきびしく、ときにはやさしくそだてるように心がけるべきである。3歳から6歳までは、自然にあそびをおぼえるころであるが、もうあまやかしたりなどせず、羞恥心や怒りをうえつけないように注意して、保母はしつけをきびしくおこなうべきである。6歳以後は、男女をわけてそれぞれの学校にかよわせる。男子はレスリング、ボクシング、馬術、弓技、投槍等を、女子ものぞむならこれとおなじことをまなばせる。またこの体育と同時に、魂をきたえるための音楽、芸術を学習させる。この学習は20歳の成人に達するまでおこなう。これがプラトオンのかんがえるもっとも理想的な幼少年期の教育である。おそらくこれは、プラトオンの理想像であるとともに、前5世紀のアテナイの一般家庭に見られる子女教育の実情であったにちがいない。

これらの教育方法のなかで、とくに注目しなければならぬのは、乳母や保母は学校以外の家庭での教育をまかせられているが、それには両親の監視の目がひかっていること、また、屋外での子供たちのしつけは保母の役目であるが、これも国から派遣された婦人監督員の監視下にあるというしくみになっていることである⁶²⁾。paidagōgos (付き人) のばあいには、直

接監視の目がついてまわるわけではないが、そのかわり日ごろから、子供の送りむかえを規則ただしくするように、きびしく主人から命じられ、命令にそむけば、『蛙』の例で見られるような笞うちの罰がまっているわけである⁶³⁾。

さらに、プラトオンの説でもう一つ注目すべき点は、子供に対するしつけの方法を、きびしさとやさしさとの中間にもとめ、きびしくするにしても、相手の気持を人間的に考慮していることである。それは彼の奴隷に対するとりあつかいかたとまったく共通する態度であり⁶⁴⁾、「そういうことは自由人に対しても、おなじようになされるべきである⁶⁵⁾」と彼は、アテナイの客人の口を通じて断言している。つまり、子守役たちにも、圧迫からの逃げ道はいくらか用意されていたのである。

保母は監視つきながら、かなり自由に自分の裁量で行動していたことは、『ヒッポリュトス』の小才をきかしてうごきまわる老保母によっても知られるが、アリストパネエスの乳母たちも、主人の監視の目をぬすんでは、ひそかなたのしみをあじわっていることを、『騎士』のなかで、腸詰屋が披露している。

「それでおまえさんは乳母 (titthē) がやるように、ひどいそだてかたをしているんだ、食物をかんでおいて、ガキの口にちょっぴりほうりこんでやる。自分はその三倍ものみこんじゃっ

ちにつれられ、村の神域にあつまってあそぶのであるが、そのとき保母は子供たちの行動を見まもり、しつけをする。さらに「毎年あらかじめえらばれている12人の婦人たちの一人ずつが、それぞれの集団にわりあてられて、保母たち自身と、おなじ年ごろの子供の集団とを監視する。」

60) Ar., *Th.* 609, *Lys.* 958, *Hip.* 716 f. J. Vogt (*op. cit.* p. 105) は2歳になってから nanny (τροφός) の手にあずけると言う。

61) Pl., *Nom.* 720 C~796 D.

62) *ibid.*, 794 A~B. 3~6歳の子供たちは保母た

63) Pl., *Lys.* 223~B では、ソクラテエスがなんども追いはらおうとしたにもかかわらず、付き人たちは大声をはりあげて、子供たちを呼び、強引に家へつれて帰ってしまう。これによっても主人の日ごろの監督のきびしさを知ることができよう。

64) cf. Pl., *Nom.* 777 D~778.

65) *ibid.* 794.

てさ⁶⁶⁾。」

いずれにしろ、『リュシス』の例にあるように、ソクラテスの制止にもかかわらず、大声でわめきたてて、主人に言いつけられたとおりに、子供たちを家につれて帰る付き人たちも、家族の目にかくれて欲望をみたく乳母にしても、彼らの行動の内奥には、共通した心理がはたらいていたことを感じさせずにはおかない。

§5. 家 事

前5世紀のギリシア、またはアテナイの奴隷たちが、一般市民にくらべてどういう生活をしていたかという点については、アリストテレスの極端な奴隷=道具主義や、プラトンの中道的な奴隷観がしめすように、かならずしも見かたは一定していないが、すくなくともプラトンの説が中道的であるのは、彼自身がそう言っているからではなくて、客観的にアリストテレスのかんがえかたと対極をなす奴隷観が別に存在するからである。

それは古代ギリシアの家庭生活にふれるばあい、だれしも避けてとおるわけにはゆかない“Old Orgarchy”と称されている著者不明の、或は古代からクセノポソンの作とも言われている論説のなかに見られる⁶⁷⁾。

このなかで著者は、当時の奴隷たちが、ほとんど一般市民たちとおなじ程度の自由な生活をおくっていた一面を紹介している⁶⁸⁾。それによ

ると、「アテナイ市民といっても居留外人や奴隷よりもいい服装をしていたわけではないし、面相だってそんなにりっぱであるわけではない」とのべ、市民と奴隷とのあいだには差がないので、もしも奴隷が市民になぐられるのが習慣になっているとすれば、市民もまた奴隷とまちがえられてなぐられることもある、と言う⁶⁹⁾。それほど奴隷と市民とは外観から区別するのが困難であったわけである。V. Ehrenbergも奴隷が主として着用していた衣類の型はたしかにあるけれど、それはまずしい一般市民も着用していたかもしれないという見解をしめしている⁷⁰⁾。

また *Old Orgarchy* の著者によると、奴隷のなかには自分で賃銀をかせいで、裕福な生活をしている者もいて、市民の方がかえって彼らから金銭をめぐんでもらうようなことさえあるのだから、「自由市民に対してあたえられている平等の発言権 (*ισογοσία*) を、奴隷にもあたえられる」のだと言う⁷¹⁾。奴隷にも自由市民とおなじように平等の権利があたえられることは、もはや奴隷制の否定に通じることを意味し、道具主義とはまっ向うから対立する思想と言わねばならない。もちろん、この著者がのべていることは誇張が多く、Ehrenbergの言うように“a one-sided view”であるかもしれない。しかし、家庭における子供たちのしつけをすべて奴隷にまかせ、海戦に参加した奴隷を自由市民とし、自分でたくわえた金を主人にあたえて奴隷の身分を解放されるという、現実におこなわれている慣習をかんがえあわせるとき、それは一つのありうる奴隷生活を示唆する思想と言えないこともない。

66) Ar., *Hip.* 716~18.

67) いまここで、この論説がクセノポソンの作であるかどうか論じるのは適当でない。くわしくは、G. W. Bowersock, *Pseudo-Xenophon, Constitution of the Athenians*, Introduction, The Loeb Classical Library, Xenophon, VII, pp. 461~473 を参照。

68) この部分をとりあつかっているのは、Gustav Gilbert, *The Constitutional Antiquities of Sparta and Athens*. Translated by E. J. Brooks & T. Nicklin, Argonaut. Inc., Publishers, Chicago, 1968, p. 173. A. R. W. Harrison, *The Law of Athens, The Family and Property*, Oxford, 1968, pp. 166~7. V. Ehrenberg,

The Peop. of Ar., p. 184 ff. G. Gilbert のほかは、この説をまともにはうけとっていない。

69) *op. cit.* I, 10.

70) *op. cit.* p. 184. 服装によって奴隷と市民との区別をするのが困難なのは、奴隷たちが主人から家族の古着や靴をあたえられていたことにも原因があろう。cf. Xen. *Oik.* XIII, 10.

71) Ps-Xen., *op. cit.* I, 11~12.

民主主義の社会であっても、アテナイでは、市民の男女の差別は明確であった。それは、市民と奴隷との関係に類似しているところがある。たとえば、民会場には奴隷が入場できないように、婦人も立ち入りを禁止されていた。アリストパネエスは『女の議会』でこの不平等を揶揄している⁷²⁾。女性は国の政治に関与することはできなかったが、そのかわり家庭の経済管理は女性に一任された⁷³⁾。これは奴隷が国事に参加できず、家事労働をおしつけられているのと好一対と言えるだろう。ただし、主婦は家政の支配者であるのに、奴隷は監視されながら労働するところに大きな差異がある。

i. 炊 事

奴隷が日常たずさわる家事労働のなかで、炊事、水汲み、買物、掃除はそのおもな仕事であるが、これらの分野では自由とは言えないまでも、かなりの程度まで、彼らは自分の意思どおりに腕をふるって、それぞれの技能を発揮することができたとおもわれる。

アイスキュロスの『ヘカベ』のなかで、ポリュクセネエは、奴隷の身としてこれからとらわれてゆく自分の将来をなげいて、「これからわたしは家で粉をひかされ、部屋の掃除をさせられ、織機のかたわらに立たされて、かなしい毎日をおくらねばならないのです」と言っている⁷⁴⁾。たしかに乳母や保母とならんで、炊事や掃除、水汲みは女奴隷にわりあてられた労働であった。まずしい家庭では、奴隷の数がすくないために、一人の奴隷がこれらの仕事を一手にひきうけざるをえないばあいもあるが、奴隷の数にゆとりのある家庭では、それぞれの仕事は分業でうけもつのがふつうである。

料理をつくるために、まず召使 (terapōn) は

72) アテナイの女たちが男に変装して民会場にのりこむ、というテュマ自体が、民会場に婦人が入場できない不平等の喜劇的批判である。Ar., *Ekk.* 93 ff.

73) Pl., *Nom.* 805 E. Ar., *Ekk.* 212.

74) Eur., *Her.* 362~4.

市場に買物に行く。買物をするのは男女の区別はない⁷⁵⁾。アゴラ (公共市場) では、あらゆる品物が売買されていた。果物類、穀類、食肉、香料、油、等等⁷⁶⁾。これらの品物は種類によって店があつまっているのだから、客はアゴラの地域区分を品物の種類によっておぼえていたと言われ、クセノポオンは「……たとえなんであれ、召使にアゴラから品物を買ってくるように命じても、彼らのだれひとり道に迷うものはいない、それぞれの品物を買うにはどこへ行けばいいのかだれもが知っている⁷⁷⁾」とのべている。

これらの買物に要する会計はすべて一家の主婦の管理にまかされていた。プラトオンは『法律』のなかで、「現在わたしたち (アテナイ) の婦人に関してはこういうぐあいになっています。世に言われているように、財産はすべて一つの家庭にまとめ、婦人にその管理をまかせているのです⁷⁸⁾」と紹介しているが、これはアリストパネエスの作品のなかでも符合する。『女の議会』で、プラクサゴラは「家庭においてもわたしたちご婦人がたに家政や家計 (*ταμεία*) をまかせている⁷⁹⁾」と発言している。

ところがこれに対して、主婦だけが家政をまかされていたのではなく、召使たちもそれにとずさわる機会があたえられていたとかんがえられる意見もある。「機織を知らない召使がつれてこられたとき、彼女にそれを知るようにおしえてやり、彼女の価値が倍加すればあなた(妻)はたのしくなるし、また家計や給仕について無知な女がつれてこられたとき、これを知るようにおしえ、彼女を信頼させ奉仕させ、彼女がな

75) Ar., *Lys.* 633. *Lysias*, I. 8. 買物に行くようすについては、前2世紀の作品であるが、The Metropolitan Museum of Art (New York) の“Old Market Woman”の大理石像がその典型的な姿を表現している。

76) Athenaios, *Deipnosophistai*, XIV, 640 b~c.

77) Xen., *Oik.* VIII, 22. cf. *The Athenian Agora*, American school of Classical Studies at Athens, 1962, p. 16. T. B. L. Webster, *op. cit.* p. 60.

78) Pl., *Nom.* VII, 805 E.

79) Ar., *Ekk.* 212.

によりも価値あるものになれば、あなたはたのしくなる⁸⁰⁾」というわけである。つまり、裕福な家庭の主婦は、召使に自分の助力者となるようにもとめ、そのように召使を教育するの必要を感じていたとおもわれるのである。

炊事や料理に関しては、これにも男女の区別はなく、小麦を粉にひき、それをこねてパンを焼くのは、料理役たちの重要な仕事であったし、また彼らはそのような自分の仕事に誇りさえいだっていた⁸¹⁾。料理については、火をおこしたり⁸²⁾、臍物を処理したり⁸³⁾、肉や魚を焼いたり⁸⁴⁾、味つけをしたり⁸⁵⁾など、アリストパネェスはかなりこまかく彼らの仕事ぶりを紹介している。

こうしてできあがった料理は、主人をはじめ家族のものに、召使 (oiketēs) が給仕するのである⁸⁶⁾。

ii. 水 汲 み

炊事、掃除、洗濯には欠かせない水を、井戸から汲みあげてはこぶのは、女奴隷の役目であった。『リュウストラテ』に登場する婦人たちが言っているように、アクロポリスの北麓にはうつくしい水がわき出る泉があり⁸⁷⁾、その水はテラコッタのパイプによって九噴泉 (Enneakrūnos) と呼ばれる給水場に通じていた⁸⁸⁾。

80) Xen., *Oik.* VII, 41; IX, 11.

81) Ak. 1124, *Hip.* 52 ff., Ba. 514; Eur., *Tro.* 491 ff.; Menan., *Dys.* 888. μάγειρος (料理人) には語源的にパンを焼くという意味がふくまれている。Men., *Dys.* 646. 「おれたちの胸まえは神聖なんだよ」と料理役が言っている。

82) Ar., Ak. 1014; Men., *Dys.* 547.

83) Ar., *Pl.* 1169; Men., *Dys.* 548.

84) Ak. 1003 ff, 1042, 1119; *Ei.* 1040 ff.

85) *ibid.* 1040, 1126.

86) Ar., *Hip.* 50 ff.; Ak. 1098 ff, 1142.

87) Ar., *Lys.* 327 ff.

88) *The Athenian Agora*, A guide to the Excavation and Museum, American School of Classical Studies at Athens, 1962, p. 97. cf. Marjorie & C. H. B. Quennell, *Everyday Things in Ancient Greece*, B. J. Batsford, London, 1968, p. 127.

そこには朝はやくから、婢女たち (dūlēsīn) が水がめをかかえて、水を汲みにやってくるので、水汲み場はいつも彼女たちの話し声や壺のぶつかりあう音で喧騒をきわめていた。コロスの女が報告するその水汲み場の描写は誇張とばかり言えない。

実際に、アテネナイのアゴラ周辺部には数多くの井戸があり、American School of Classical Studies at Athens の発掘調査報告によると、そこには 400 以上の井戸があったことが知られている⁸⁹⁾。しかもその時代範囲は、アルカイック期からヘレニズム期にいたるおよそ 300 年間にわたるもので、九噴泉は現在の聖アポストリ教会と第一南ストアとはさまれたところにあり、アゴラではもっとも大きな給水場であった⁹⁰⁾。パウサニアァスも 2 世紀なかばごろ、このアゴラをおとずれ、「アテネナイ市には、いたるところに井戸 (phreata) があるが、これ (九噴泉) は唯一の噴泉 (pēgē) である」と記している⁹¹⁾。わざわざ井戸から水を汲みあげなくても、豊富にあふれ出る水をもとめて、水汲み女たちが朝はやくからここにどっとむらがり寄せたのも無理はない。

噴泉式の給水場はアテネナイ以外では、コリントスのアゴラ北東部にある通称「ペイレエネの泉」が有名である。これは今日もなお水脈をたもっており、4 部屋の貯水槽にいったん水があつめられ、トンネルを通過して 6 箇所の出水口から水が噴き出てくる。その水が前庭の貯水場 (約 10×6.7 m) へながれこんで、それが常時使用されるようにたくわえられている。アテネナイの九噴泉が姿を消している現在、このペイレエネの泉はその構造を知るうえで貴重な存在である。

メナンドロスの『気むずかし屋』では、井戸

89) *Waterworks in the Athenian Agora*, American School of Classical Studies at Athens, Princeton, New Jersey, 1968, p. 4.

90) *op. cit.* p. 5.

91) Pausanias, I (Attica), XIV, 1.

と水汲み女が重要な役割をはたしている。保母役 (trophos) の老婆が、井戸のなかへかめ (kados) をおとし、それをとりあげるために、主人の二又の鍬にひもをむすびつけ、ひきあげようとしたら、ひもが切れてその鍬も井戸のなかへおとししてしまう⁹²⁾。

その当時、水を井戸から汲み出す方法は、kados というテラコッタの水がめをひもでくりつけて井戸のなかへおろしていた。ローマ時代では、木製に鉄のたがをはめた桶を使用していたが、一般には土製のかめがつかわれていた⁹³⁾。井戸の構造もアゴラで発掘されているものによると、直径約6mの円形で、深さは2.5~37mとさまざまだが、平均10mほどであった⁹⁴⁾。また、井戸の周壁は、前6世紀では、煉瓦状の石をつめてかこい、前4世紀になると、テラコッタの土管が使用されている⁹⁵⁾。さらに、井戸の地上部分は、やはりテラコッタの円筒状(高さ約0.5m)の枠(日本のいわゆる「筒井筒」)をとりつけて、井戸のなかへおちこまないように工夫してあった⁹⁶⁾。たとえ手がすべっても支障がないように、かめをむすびつけたひもの他端を、この井筒のまわりにしばりつけておくのがふつうであるが、メナンドロスの保母のばあいは、ひもがくさっていたために、それが切れて、かめをおとしたのである。

また、まずしい家庭では手でひもをひきあげていたが、裕福な家庭では、井戸の周囲に柱を立て、それに木製の滑車を取りつけ、ひもの先には碇形の鉄製の鉤 (kreagra) をむすびつけて、それで kados をつりさげるようにしてあ

た⁹⁷⁾。このような設備をするのは、一般家庭では経済的に負担が大きかったらしく、アリストパネエスの『女の議会』で、若者が老婆にしがみつかれたとき、「もう水がめをつるす鉤 (kreagra) を買わなくてもすむぞ、こんな婆さんが下へおりて、井戸のなかから水がめをひきあげてくれるんなら⁹⁸⁾」と、おもわずさげんしていることばが、そのあたりの事情をよく物語っている。

iii. 機 織

オデュッセウスの妻ペネロペイアが、夫の帰還をまつあいだ、毎日、織物をして心をなぐさめていたことや、神話でも、アテナ女神とアラクネエがたがいに織物のわざをきそいあった話などから知られるように、機を織ることは、奴隷の仕事ではなく、一般市民の婦人に属する仕事であった。しかし、エウリュピデエスの『ヘカベ』では奴隷の身となるポリュクセネエが、これからあたらしい主人にパンを焼いたり、家の掃除をしたり、機を織ったりさせられる、となげいている⁹⁹⁾。彼女が奴隷の仕事であるパン焼きや掃除とともに、機を織る仕事を連想したのは、実際に奴隷もまた主婦のかたわらで、その仕事をしてきた証拠であるのかもしれない。しかしそれは女奴隷の主要な労役ではなく、家政のばあいとおなじく、あくまでも主婦の監視や指導のもとに、主婦の助力者として「機のかたわらに立たされて¹⁰⁰⁾」いたにちがいない。

『雲』では、ストレプシ阿德エスが自分の妻を評して、「彼女は機を織った (ἐσπάθη)¹⁰¹⁾」と言っている。これは皮肉をこめた女性への讃辞である。つまり、梭をうって糸を固くつめ、丈

92) Men., *Dys.* 189 f. 576 ff.

93) *Waterworks in the Athenian Agora*, ASCS, Illust. 5, 6, 12.

94) *ibid.* p. 6.

95) *ibid.* pp. 5~6.

96) *ibid.* p. 5, Illust. 8. なおアテネのアゴラ博物館にある井筒は直径0.77m, 高さ0.66m, 陳列番号 A1296.

97) *ibid.* pp. 7~9, Illust. 9, 10, 11, 13. cf. T. W. L. Webster, *op. cit.* p. 29. κρεαγρα (kreagra) は肉をつるす鉤の意。

98) Ar., *Ekk.* 1002 f.

99) Eur., *Hek.* 362 f., 前出 74).

100) *ibid.* 363~4.

101) Ar., *Ne.* 53.

夫で部厚い布を織るということは、仕事に精を出してはたらいっていることを意味していると同時に、それだけ糸を余分につかって無駄な出費をしていることから、一般にぜいたくをしているという意味をあらわしているわけである¹⁰²⁾。いずれにせよ、婦人が仕事にはげむことは機を織ることとほとんど同義であるほど、機織は一般市民の主婦にとって、日常的なつとめであったと言ってもさしつかえあるまい¹⁰³⁾。

また、これに関連して、糸つむぎや毛糸編みも一般市民の女性の仕事とかがえられる。『リュウストラテ』のなかで、市民のリュ

ウストラテは、役人と議論をしている最中でも糸つむぎの糸玉をもっていて、その糸玉を例にあげ、国の政治の混乱をもつれた糸と見なし、女性がこれをときほぐしてりっぱに布を編んでゆくように、政治家も国内の政策はもとより、外国とのもつれた交際をときほぐして、スパルタとの戦争（ペロポネソス戦争）をはやく中止すべきだと説得している¹⁰⁴⁾。

見かたをかえれば、こういう比喩が召使たちの仕事にそのまま適用されえないところに、自由市民と奴隷との越えがたい深い溝があると言えるかもしれない。（つづく）

〔横浜国立大学経営学部教授〕

102) B. B. Rogers, *The Clouds of Aristophanes with a Translation into Corresponding Metres, Introduction and Commentary*, Bell & Sons, London, 1916, p. 10; cf. *Scholia in Nubes* 53, *Scholia Graeca in Aristophanem*, Fr. Dübner, Parisiis, 1877. Starkie のように、これを卑猥な意味に解釈する意見もあるが、Dover や Cyril Bailey の意見の方が妥当。

103) K.J. Dover は“*Weaving was the characteristic activity of the good housewife*” とのべ、Pl., 208 D の例を指摘している。 *Aristophanes Clouds*, edited with Introduction and Commentary, Oxford, 1968, p. 101.

104) Ar., *Lys.* 567 ff; 536, 519.